

令和6年度 第1回 教育課程編成委員会（看護学科）議事録

出席者：田中真美 島根県看護協会理事

多久和かおり こころの医療センター看護局長

神田真理子福校長 落合美枝教務部長 鎌田麻美看護学科長 堀内あさみ福学科長

看護学科よりの現況報告（配布資料参照）

1. 実習の現状報告と課題について
2. カリキュラム変更後の取り組みと課題について
3. その他 ①教員の教育力の向上 ②職能団体等外部との連携強化 ③指導教員の人材確保

上記について現状と課題について配布資料に基づき鎌田看護学科長より説明後意見交換を行った。

（以下敬称略）

田中) 電子教科書はどのような使用法をしているのか。タイムリーに調べるということを目的としているのか。

鎌田) ダウンロードしてある教科書のアプリで調べ学習をしている。Wi-fi がなくとも参照できる。また、使用に関しては実習病院の規則に則る。従来何冊もの教科書を持参していたことから考えると学生の負担は軽減していると考える。今年度から2年生と1年生が電子教科書を使用し、次年度から全学生タブレット使用になる予定。

田中) 記録を持ち帰らないことによってカンファレンスの形態は変わったのか。

鎌田) 基本的には変わっていない。領域によりカンファレンスのテーマを提示していることがある。

田中) 国家試験一般状況の変化について、事例の落とし込み方などを変えていく必要があるのか もしれない。実習施設側もそのことを理解して体制を整える必要がある。

鎌田) 一事例を深めることがなかなか難しい。現場にも協力していただけるよう国試に連動した実習が組めるといい。

田中) 教員の不足の問題や人事交流など、県のほうでも現場との連携があるといいと思う。

鎌田) なかなかそのような場がないと思っていた。機会があれば参加させていただきたいと思っている。

多久和) 3人の就職があった。皆さん県中希望だったこともあり、ここでの仕事が楽しくなると ように育てていきたいと考えている。だんだん表情が柔らかくなってきた人、インシデントに巻き込まれ動搖した人、自然に患者さんに寄り添っている姿を見て大事に育てていこうと思っている。

〈学校に対しての要望についてはどうか〉

多久和) 記録は持って帰らないということで、メモなどが置いてありどうやって調べているのか 疑問に思っている。個人差があると思うが自宅学習がどうしているのかと疑問がある。

鎌田) 基本的に個人情報を書いてあるものは持ちかえらないようにしている。各領域で国試対策

の小テストを行うようにしている。

堀内) 学生によっては、個人情報を書くメモと調べものをするためのメモを分けている学生もいる。

多久和) 「家で調べてくるように」とスタッフに伝えておこうと思う。

田中) 何が個人情報で何がそうでないのかということをきちんと指導していく必要がある。

神田) 個人情報漏洩のリスクを考えると、病院等の施設外からの記録物の持ち出しはできない。

本校でも紛失の事例があった。現在学内学習が効果的に実践できている母性領域も参考にし、引き続き学内での学習を充実させて病院実習につなげていくことも必要。精神科領域など主に外部講師が対応している領域についてはさらに学外講師との連携を図る必要がある。

落合) 周囲が気をきかせないと年々いいことなのか悪いことなのかという区別がつかなくなってきたていると感じる。(医療、看護の別なく) なかなか理解ができない。周囲で約束事を作っておかないと身についていかない。みんなで同じ目的、目標をもって関わる必要がある。看護師一人育てるのもかなり大変。(医学生:参考書、問題集などしか買わない。ライセンスを取るだけの手段しかない) 点数が高いだけが良いわけではない。

専門学校で誰でも看護師になりたいと思えばなれるというのではなく、見極めをしてほしいが非常に難しい。本人が辞めたいが保護者が認めない例などが多々みられる。

田中) 学校と病院での見極めが必要(入学試験、就職試験で見極め)

鎌田) 高校でたやすく看護に進めばといわれている現状がある。

中学校では、合格できるであろう高校を薦められ、高校に入ってから将来のことを考えるというのが現在の進路指導の状況であると思われる。

田中) 高校では中学から先を見据えて中学からガイダンスをしており職場体験も中学生からになってきている。

鎌田) きっかけがある場合はいいが、きっかけがないままだと親から、高校からすすめられてということになる。自分の意志がそこにはないといけない。

神田) 看護師になるために大学と専門学校の道がありキャリア形成、国家資格は一緒であることを高等学校等にさらに周知していくためにも、各高校の大学進学率の課題もあると思うが職能団体等との連係を図り理解してもらう必要がある。看護教員も現状を把握し対応していくことが必要である。

田中) 学校の先生のほうも将来像について知らないことが多い。准看護師に行けばいいなどと言われることがある。

落合) 病院との連携、高校の先生との連携、どちらも必要であると感じている。

田中) 県のほうでは、看護師不足、学校の入学者に対する施策を考えている。

落合) なりたい学生が減っているのか?

神田) 人口減少のため新卒ではまかないきれないため、社会人入学も考慮に入れる必要があるため、この点においても職能団体等との連係が必要と考えるが、看護協会としてはどのような取り組みがあるか。

田中) 潜在看護師への働きかけはしている。准看護師に向いている人を看護師へと働きかけをしている。

4年制の専門学校に関する話し合いが行われる。

落合) 新カリになって授業時間は減り、理解力は減っている。夏休みもほとんどない。4年制になると学生は少し助かるかもしれない。学ぶ内容は難しくなっている。進学する学生もいるが現状としては難しい状況である。

国家試験問題の変化について、現場では答えられるが、学生は答えられない。特に2拓の問題が答えられない。よって2問とも正解にならない。

〈感染症について〉

鎌田) 感染症については、現在溶連菌、コロナの感染で欠席している学生がいる。コロナに関しては、規則上は5日間欠席、病院によっては7日間、10日間などの欠席となっており、追実習、再実習の必要がある。体調管理が大切だが、感染症に関してはすっきり対応ができない状況である。今年度より学内の実習は認められることになっておりできるだけ病院での実習が必要になってくる。

落合) 極力実習に行かせるというスタンスをとっている。実習病院を増やすとどうかと思うが、それでは実習教員が足りなくなる。

多久和) 実際に感染症でその状況となり非常に申し訳ない実習になった。できるだけ病院を感じてほしい。

神田) 臨地実習では看護職の倫理綱領にもあるように、看護職の後輩育成をしてくれたために学生への対応をお願いしたい。

田中) 倫理綱領の研修は1年目、2年目、ファーストレベル、セカンドレベルなどに組み込まれている。現場の看護師との交流を考えていく必要がある。

鎌田) 学生はいろいろなことを見ている。基礎看護学実習での看護師さんたちの独特的雰囲気が自分の思っていた看護師像と違っていたと感じる学生もあり、モチベーションが高い人でもギャップを感じてしまう。

田中) 臨床でも同じようにギャップを感じことがある。

落合) 成績が悪い学生でも就職すると変わることがある。要は人間力、コミュニケーション能力の問題かもしれない。卒業さえしてくれていればなんとかなる場合も多い。

田中) 要所要所での対応が必要なのかもしれない。

鎌田) 最近の学生は思考力が乏しいと感じる場面もある。看護師の思考過程を伝えてもらう、試行発話の視点で関わってもらえるとよいと考える。

以上

令和6年度 第1回教育課程編成委員会（理学療法士学科）議事録

日時：令和6年6月8日（土）14：45～16：00

出席者：サインポスト合同会社デイサービスサイン 福田淳

島根県理学療法士会 代表

出雲医療看護専門学校 副学科長荒木 将平 神田 一路

【内容】

- 1, 現状報告と課題について
- 2, カリキュラム変更内容と今後の取り組みについて
- 3, その他

【報告について】

①学生報告

○今年度

- ・1年生（担任：高田）：学生数 22 名 休学 1 名
- ・2年生（担任：上田）：学生数 26 名
- ・3年生（担任：神田）：学生数 32 名 休学 1 名 退学 1 名

○昨年度

- ・卒業生（荒木）：学生数 37 名 卒業 34 名 留年 1 名 退学 2 名
国家試験合格率 97.1% (33/34 名)

②臨床実習の現状報告

○R5 年度（県内：89.4%、県外：10.6%）

- ・総合臨床実習（3年生 36 名）：学外実習：3 カ月、学内実習：1 カ月
- ・地域実習（2年生 31 名）
- ・見学実習（1年生 26 名）
- ・評価実習（2年生 30 名）

○R6 年度（県内：84.4%、県外：15.6%）

- ・総合臨床実習（3年生 29 名）

実習地の確保に難航

1 カ月・1 カ月・2 カ月の期間で実施

最終実習終了は 12 月近くまで実習予定（数名）

③カリキュラム変更内容と今後の取り組みについて

本年度入学生より新カリキュラムに移行（別紙参照）

- 1) 1年時の時間数を減らし国家試験対策や同級生・先輩との交流の時間を作成
- 2) 見学実習と地域実習を統合し 2年生の前期に実施
- 3) 1か月以上の実習については、それぞれの時期毎に学内演習（OSCE、臨床思考等）を時間数に追加
- 4) スポーツ関連の授業を追加

【説明に対して質問事項】

1. 臨床実習について

【荒木】

当校として実習地の確保に難渋している、県内実習地の確保にどう動けばよいか。

実習中の良い学生の条件をお聞きして、教育に活かしたい。

学生のモチベーションを上げるための工夫について。

【福田委員】

現在の学生の価値観が変わっている。

実習と就職が一致しにくい。

臨床実習のベースが変わっている。

実習アドバイザー（福田）の外部委託を検討。

施設での実習方法（学生をスタッフとして働かせる）を伝えることで実習地側の負担軽減が可能か。

中核病院での島根大学医学部附属病院での実習受け入れ条件を進めることも一つの手段。

【石田委員】

県内の病院だけで実習を行うことには難しさがある。県内には 4 校の理学療法士学校があるが、県外からの実習の受け入れも必要となる。また、2 対 1 のモデルを強く推す要素が少ないことも課題となっている。

病院の立場から見ると、実習生の態度面などの質を担保するために学校が重要な役割を果たしている。学校の運営にも関わるため、どのような学生が良いかを考えることが必要だ。最低限の部分をクリアしているかどうか、やる気がある学生で一緒に成長していくかが求められている。県士会の立場から見れば、最低限の基準は施設ごとに異なるが、病院の立場から見ると学校で学んだことを最低限知っていること、解剖学や生理学などを理解していて、ある程度同じ目線で見ることができること、職員と同じ目線で態度を持つこと、そして共感できることが重要とされている。

学校でも良い学生が実習中でも良い学生とは限らないが、良い先生や良い PT に出会った学生は良い傾向が見られる。カリキュラムについては、現場の先生を招くことが少ないが、良い PT に出会う機会を作ることは大切である。様々な領域で働く PT を呼び、そのやりがいや仕事について話を聞くことが重要だ。

期待されたときにやる気を出し、患者さんとのやり取りでやる気を出す学生が理想である。最初からやる気があることも重要だが、患者さんからの言葉や意味を伝えることができることも大切である。

【荒木】

学生の能力（人間力）を高めるためにはどうするべきか。

【福田委員】

橋村さんが新しく教員として赴任するため視点を広げることができる。

長期実習に向かうまでに気付ける学生を育成。

学力を優位に上げることと、世渡り上手の学生を育成。

学生の基本的能力を満たすことが重要。

学校として3年で理学療法の学びだけではなく、お金知識など社会人として必要なスキルの学びも重要。

多様化に対応するため、別のカリキュラムを考える必要がある。

2. 就職後の新人教育に関して（同窓会・研修会）

【荒木】

当校も10年を迎え、卒業生も増えている、卒業生に同窓会や卒後研修会を企画したい。

今年、研修会を実施したがより多くの参加者を見込める案はあるか。

【福田委員】

卒後のサポートとしてYMCA米子医療福祉専門学校が強い印象である。数名をターゲットにするようなコアな勉強会を数回実施している。多数の参加者がある程度理解する内容の研修よりも少人数の参加者が、かなりの知識を得て満足度が高い研修会が良いと思うので、研修会のターゲットを明確にする必要とよいのではないか。

【石田委員】

同窓会があっても良いのではないか。（卒業生の発表など）

3. その他

【荒木】

当校として在校生に職業理解を進めたいが良い案があるか。

【福田委員】

学生を在学中の中で適材適所への誘導が必要。自身の向いている職を探させるのも一つの手段。

【荒木】

学科として方向として、実習地確保のため、施設での学生の動き方について研修会の実施の検討する。入口を考えることも重要であるが、現状として入生学生も多様化しており、進級の基準をどうしていくかの方が、現時点では考えていく必要があると考えており、進級の基準については検討していきたい。

以上

令和6年度 第1回教育課程編成委員会（臨床工学技士学科）議事録

1. 日時 令和6年6月8日(土) 14時45分～16時15分

2. 場所 101教室

3. 参加者 錦織 伸司（島根県臨床工学技士会会长）

石飛 有基（出雲徳洲会病院 副技士長）

加藤 智久（出雲医療看護専門学校臨床工学技士学科長）

中山 弘幸（出雲医療看護専門学校臨床工学技士学科副学科長）

4. 議事録

1) 昨年度の振り返り

加藤

令和5年度の臨床工学技士の学科は、1年生の在籍数が12名、2年生が11名、3年生が15名でした。定員が30名ですので昨年度は12名で充足率が40%になっております。かなり募集に関して苦戦が強いられましたが、退学はゼロであり1年生で入学した方を卒業に導ければと思っております。しかし、昨年の3年生の国家試験の結果は73.3%ということで15人中4人が不合格であり、悔しい結果にはなりました。その要因としてメンタルのところもあるのですが勉強をしてもなかなか自分の中で落とし込めていない部分があり、やればやるほど不安で寝むれない、寝むれていながら頭が動かない、頭が動かないから結果も出ない、という負の連鎖がありました。昨年の3年生はリモートの煽りの最後の学年であり、1年生と2年生の時の学力が弱い学年でしたので最後詰め込みの知識で迎えた結果になり、例年よりも追い込んで勉強させたことがよくなかったと感じております。

今年の卒業生に関しては1年生のとき入学者数が20人いましたが、進級時には5人退学が出てしまった年でした。その中で最後のコロナ禍であり、リモート授業が続いた年でした。ほとんど登校がなく、教員が学生を見ることもできず、気が付いたら辞めたいという状況が続いていました。もう少し学生に向けて気配りをしなければならなかったという反省点はある中で、去年一昨年と退学をゼロに抑えることができたのはよかったです。

今年は現時点で入学者数1年生20人、定員が30人ですので入学充足率66%と向上してまいりました。2年生に関しては引き続き1年生が2年生に進級して12人、3年生に関しては2年生がそのまま3年生に進級をして11人という形になり人数変えずに今に至っております。

2) 臨床実習について

臨床実習は例年5月6月と2に渡って各15日間お願いをさせて頂いておりますが、今年も13施設の病院様に臨床実習を引き受けさせていただきました。昨年と違う点としましては鳥取県島根県西部で臨床実習の引き受けをお願いしましたが、依頼を少なくしています。学生の地元が島根県東部中心でもあり、出雲・松江・安来の施設で実習を行い、できるだけ家から通わせたいという思いがあります。出雲市・松江市の施設にはかなり負担をかけておりますが、現在1期目も問題なく帰ってきており明日から2期目に移行します。

人工心肺業務の実習を行わなければならないため、浜田医療センターや鳥取県立中央病院・津山中央病院には宿泊を取って実習に行かせております。そちらの先生方とも連携がうまく取れておりますので今後2期に渡ってどのような結果になるかを9月の臨床実習指導者会議でフィードバックしていただければと考えております。

も今までレポートの完成度がかなり低いと指摘を言われておりましたので、昨年からの取り組みとしまして学生が今まで書いてきたレポートの良い例を開示してもよいのではというご意見をいただいたた

め、実習に行く学生には先輩方のレポートを開示しております。今まで臨床実習を行ってきた学生のレポートをPDFにしております。レポートの指導は2年生の冬から担当の先生に指導していただいております。しかし、臨床実習のレポートは決まった形がなくその場に合わせたものを書かないといけないということで、なかなか学生も迷っていたというところもあります。先輩方のレポートよい例を出させてもらって書かせてはいますが、それに甘んじてしまう学生は出てきております。レポートの悪い例も併せて学生に開示しておりますので今年はレポートに関しては改善されていると感じております。

3) 国家試験について

今年の3年生は昨年と比べて平均点が10点ほど高いです、この10点高いという数字は令和4年度、令和3年度に国家試験100%を取得した学生と同等の実力はあると感じております。しかし上位と下位の点数の幅が広がっており、上位層に関しては国家試験合格レベルで8割近くの点数を取得しております。下位層に関しては、かなり低い点数であり、今現時点では国家試験はおそらく不合格になるだろうと感じております。下位層の学生をどのように対策して行くかによって決まると思っております。今年、全員今の11人が国家試験合格へ導いていきたいと考えております。今後は保護者と連携しながら家庭学習状況、クラスとの連携しながら学生同士で教え合いを強化していこうと思っております。

4) 就職について

就職ですが県内希望者が割と少なく、例年と比較しても県内に残りたいという学生は少なくなってきた傾向にあるかなと思っております。コロナの影響もありますが、都会に憧れる学生が多く、東京・関東に行きたい、関西に行きたいという学生たちはどんどん増えております。以前は九州に行きたいという学生もいましたが、少なくなり、その分東海に出たいという学生が少しずつ増えてきております。今年進学希望を考えている学生が2名おります。今就職と進学で悩んでいる状態で確実に進学と決めておりませんが、4年次編入を考えております。姉妹校で大阪滋慶医療科学大学がありますのでそちらに行きたいという学生と、もう1人は全国の大学を見て決めますという学生と分かれております。

業務内容がわからない中で就職活動をしていましたが、臨床実習から帰ってきて働き方を理解した段階で就職活動を行うとより現実的に動けるのではと感じております。

5) 当学生について

加藤

本校の学生について何か意見はありますか。

錦織

今までの学生と比べて臨床実習のとき目を輝かしてワクワク感を出す学生が少なくなってきたと感じております。1期生、2期生はそのような印象があったのですが、現在はほとんどいなくなっている気がします。

言われたことはただメモを取るだけで質問もなく最近の学生はこのような傾向なのかと感じております。

加藤

バリバリ超過勤務などをして給料を稼ぎたいという学生よりも自分の時間を有意義に過ごしたいという学生が増えてきました。全国的に見ても残業を嫌がり、時間から時間しか働かない若手が増えていると聞いております。働き方改革の一環でよい傾向ではありますが、自分が覚えてというのは少なくなってきたと感じております。業務を覚えて早く一人前になりたいという若手も減少し、誇りをもって仕事をしているという臨床工学技士も減少しているのではと考えております。

石飛

当院ではありがたいことに時間外はほとんどありませんが、時間外や休日の呼び出しも積極的に来てもらえております。出退勤管理も 30 分越えると残業申請をしなければならないため早く帰ろうという意識が根付きだしました。

錦織

割り切って早く帰ろうという取り組みは非常に良いことですが、1年目、2年目は仕事を覚える段階なので、業務が終わるまでは残ってそれに関して文句を言わずに自分らが成長するためと思ってやってもらっています。しかし地域の急性期病院で待機時にお金が出ません。以前は実は人工心肺ができる人が待機を持ち、そうでない人は休みが多く不公平感が出ておりました。人工心肺以外で応援ができるような体制をとり、業務の平均化を図りましたが、なかなかうまくは行きませんでした。

加藤

県立中央病院には高校生から病院見学を引き受けてもらっておりますので高校生、新1年生の時から県立中央病院で働きたいという学生は何人かいます。徳洲会病院は斐川出身の学生が増えており、地元に残りたいということで第1選択を徳洲会病院にしたいという学生も増えております。

6) カリキュラムについて

加藤

昨年度から新カリキュラムで行っております。現在の2年生は新カリキュラムで行っております。旧カリキュラムと大きく変更はありませんが、今まで基礎科目を多く取り入れておりました。数学が3単位、英語が3単位としていましたが新カリキュラムでは2単位に減らしております。減らした分応用科目を増やしております。専門分野のところで臨床機器および臨床支援技術で臨床支援学という科目を増やしております。タスクシフトの影響で臨床工学技士の業務範囲が増え必須科目となりました。

臨床実習が4単位～7単位に増えております。現在行っている臨床実習と同じ内容ですが、令和7年度より臨床実習指導者講習会へ参加していなければ実習の受け入れが不可能となります。1日8時間と計算して拘束時間も含めてなんですが実質24日間行けば180時間になり、22.5日でクリアしておりました。7単位では実際計算すると28日間まるまる行かないとクリアできません。実習では1単位が45時間です。45時間のうち30時間は病院で受けて15時間は自宅学習という形にしております。2・3時間ぐらいのレポートを書かせていただきたいというところがあります。まあその基準が難しいですけど裏表一枚1時間としましてだいたい3枚分ぐらい書けば3時間ぐらいになるかなという計算にしております。ブラッシュアップしてどんどん良いものにして行こうと考えております。

錦織

臨床工学技士だけではなくて看護師を含めてであるが、説明不足のトラブルのクレームがすごく多いと感じております。しっかりした日本語を使わないと誤解を招いてしまう恐れがあります。

石飛

学生が書いてきたレポートをチェックし指導を行い、再提出をさせております。実習での課題や問題をレポートで書いてもらえると嬉しいです。なかなか学生が何を考えているのか、何に興味があるのがわかりづらくなっています。

7) どのような臨床工学技士が望ましいか。

加藤

今まで学生の就職を引き受けてもらっておりますが、どのような学生がよいでしょうか。

錦織

勉強面よりもコミュニケーションがとれる学生が良いと感じております。受け答えができ、返事ができる技士が一番です。

石飛

徳洲会でもコミュニケーションが求められます。今まで実習を取った学生でも返事が無かったりなど会話がつながらないケースがありました。わからなくともよいのでわからないことを伝えることができる学生が一番と考えております。

錦織

専門学校の入学生も自分自身で臨床工学技士を選んで入ってくる学生ばかりではないと思いますのでモチベーションを保つのが難しいのではないでしょうか。先生方も苦労されておりますか。

中山

モチベーションが低い学生の受け入れが多くなったと感じております。モチベーションだけではなくメンタリティが低かったり、自己嫌悪感が強かったりと特殊な例も増えております。そこを3年間で教育しなければならないため、スタートラインが低い分ゴールも低くなることをご承知いただければと思っております。

加藤

次の教育課程編成委員会が12月1月になります。1年間の振り返りになりますので是非今年一年の当科の振り返りを聞いてもらいご指導いただけたらと考えております。本日はありがとうございました。

以上